

あんぜんの 安全

月一回ないし二回刊行予定
創刊前に数回準備号を発行します

準備 11 号

あかりとあかし

05/11/10

NPO法人 安全学研究所 Organization of HOLONOMY 〒190-0012 立川市曙町 2-42-23 ア・パソライフ立川 614

Tel -Fax 042(521)2988

Email: holonomy@aa.bb-east.ne.jp

URL: <http://enjoy1.bb-east.ne.jp/~holonomy>

前号のお詫びと今後の方針

1面 <前号のお詫びと今後の方針>	10~13面 <最終回 古稀虹の途方に 暮れている日々> (辛島司朗)
2面 <二辞典 安全の定義>	14~15面 安全シリーズ「客室の安全 (キャビンセイフティ)」 (寺田)
2~3面 <第3回 安全の諸問題> (杉野)	16面 編集後記
4~9面 <第三回:安全学進散ホリソン> (辛島司朗)	

この研究所の活動もおかげさまで細々とながらも、先月7日に設立から丁度一年が経ちました。何度も本格的な活動展開を予告しながら申し訳ないことにのびのびになってしまっておりますが、また手違いで、前号を1号として発行するという逸まった誤りをしてしまいました。訂正してお詫び申し上げます。

正しくは、準備10号です。本格的な創刊号からはなるべく実践活動中心の「あかり号」と理論活動中心の「あかし号」とを分けてゆきたいとも考えています。

昨年12月より会報をこのように準備号として発行してきたわけですが、体裁もなかなか思うように整わず、日も遅れがちで申し訳なく思っております。今回はその準備号も11号を重ねたわけですが、現在本格的な新体制を整えるべく準備をしているところです。11月16日に時間を少し長くにとって理事会を開催し、今後の新体制について検討したうえで、体制を整え、次回または次々回くらいに改めて創刊号の会報を発行する予定ですので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

以前にも何度か述べましたように、あかりとあかし即ち実践活動と理論的活動とを併せて活動したいという意図からNPO法人としての活動を開始したわけですが、まづはそれ以前の任意団体のときからの理論的活動をまとめ構想を展開しながら、他方で実践的活動者からの参加をお願いしています。安全学というまったく新しく産み出されたばかりの実践的な学問によって、安全問題として明確に捉えきれていなかった分野についても、この安全という視点からあらためて見直し考え直すことで、解決の本筋を正確に捉え、様々な分野を総合することができるようになってゆくと考えております。どうか積極的な提案をお寄せ下さい。

講演会なども今後行ってゆきたいと思っておりますので、講師としてご協力いただける方などもご連絡をお願いいたします。勉強会にもふるってご参加下さい（詳しくは最終頁をご覧ください）。

またこの会報へのご寄稿もお願いいたします。現在、新しく様々な方に寄稿をお願いしております。今後ともご期待下さい。以前のアンケートのご意見をまだ活かさきれておらず、申し訳なく思っておりますが、できるだけ早く取り組むつもりです。今後とも忌憚のないご意見やご助言などもお寄せくださいますよう、お願いいたします。

第3回 安全の諸問題

人道支援と国益と安全の道

杉野 元子

去る10月8日未曾有の大地震がパキスタンを襲った。死者は7万4000人以上とも8万7350人に達したとも発表されている。厳冬が迫っているが、各国の支援抛出の動きは鈍く、11月6日、各国への国連の援助要請が重ねて発せられたという。

日本からも国際緊急援助隊の救助チームや医療チームが派遣され、さらに陸自の派遣など、様々な援助がなされているが、緊急援助物資の供与について日本政府が9日に決定したその額は2500万円相当で、その具体的内容は毛布2000枚、浄水器、発電機各20台、ポリタンク768個などなのだろうが、被災者300万人ともいわれるこの災害に対してやはり少ないように思う。

日本の最初の活動は国際緊急援助隊の救助チーム49名（警察、消防、海上保安庁等の要員）によるものであるが、この救助チームは本来災害発生から72時間以内に全活動を終えるべき生存者救出を目的とするチームで、9日午前に被災地に向けて出発し、18日に帰国して解散式を行っている。この日本チームの現地入りが52時間後であったことは遅滞であり、そのためか生存者救出はできず三遺体を収容したのみであったのは惜まれることで、更なる改善がもとめられるところであるという（毎日新聞10月24日付「社説」）。

その後10日には国際緊急援助隊医療チーム21名（医師4名、看護師7名、薬剤師1名等）が日本を出発し、さらに、19日に第二次隊として国際緊急援

ミニ辞典 安全の定義のために少しばかり安全について考えてみましょう。

「安全」の反対はかつては一般に「危険」だと思われていましたが、『安全学索隠』（辛島恵美子著）などの考察をへて今では、かなり多くの人がそうではないと知るようになりました。たとえばどんな危険な状況におかれても努力しだいで無事に切り抜けたり、運良く難をのがれたり助けがあらわれたり救われたりして安全な結果を得られることもあるのです（準備4号『遇害と害毒』参照）。

ただし無事であっても何の利益も得られなければ大して意味がありません。そこで、安全学研究所では安全を「所期の目的を達してなおかつ別に害毒の伴わないこと」と定義（同掲書p.39）していますが、客観的にみて単純純粋に「安全な」物や状況があるわけではなく、安全とは害毒を避けるをそこなわないために、場合によっては必死の模索や工夫を重ねて努力する慎重な配慮を伴う行為そのものであることに留意する必要があります。また、何をもち「全」や「害毒」とするかは目的や場合によって違ってきて当然です。無事とか害毒の有無といった結果だけに着目するのではなく、事の展開過程を含めて、さらには健全な価値観とは何かの探求をも含んで始めて安全をはかることが可能になるのです。

この安全にあたる英語は safety や security ではなく wholesomeness だと考え、安全学を holonomy と名づけましたが（準備1号参照）、安全をめぐる様々な言葉に関する英語についても今後触れていきたいと思います。

助隊・医療チーム 21 名の派遣が決定され、20 日に日本を出発して活動中の医療チームと交替して、約 2 週間予定で活動し、成果を挙げているという。

しかし、このチームにしても、また陸上自衛隊によって行われた援助物資などの輸送活動についてもヘリ 3 機によるというのは日本の国力からして規模の小ささに驚かされた。国内での新潟の地震においても道路が寸断されて救援がなかなか思うように進まなかったというが、そもそも装備や訓練のあり方がそうした状況に対応しきれていないのだろうか。或いは国際的な災害救助活動にはまだ対応しきれていないのだろうか。課題がありそうである。そうした技術的な支援援助問題も重要ではあるが、根本的に必要なのはそうした他国への支援や援助を国益のみには止まらない国境をこえた安全のためのものとして位置づけなおし、本格的な安全の理念に裏打ちされた自国の他国への働きかけ、あり方を求めることであろう。

支援拠出の動きが世界的に鈍い理由の一つはこのところの世界的な災害続きにもあるといわれている。日本の昨年 10 月 23 日の新潟県中越地震なども記憶に新しいが、昨年 12 月 26 日のインド・スマトラ沖地震の大津波、続いて今年 3 月 28 日に再びスマトラの大地震が、8 月末にはハリケーン、カトリーナがアメリカを襲っている。インド・スマトラ沖地震の場合には観光地のせいか、各国の死者が出たところも多かったため関心が高く、義捐金などもよく集ったようであるが、それに比してパキスタンへの関心は薄いという。

政府が直接に行うばかりでなく、特にアメリカの場合は社会問題もからんで NGO や NPO も援助支援活動に深く関わっている。non-government としての NGO の特徴は民間の資格にあるが、本来単に政府に所属する者でない者の活動であることに止まらず、公共性とか公益をめざし、その支援援助の利益が受手に分配されることを目指すものであるが、そのことを明確に打ち出すのが non-profit を冠する組織 NPO である。準備 1 号で辛島司朗氏が指摘しているところであるが、non-profit といっても全く何の利益もない無益という意味である筈はない。当然、non-self-profit のことである。最近、NGO や NPO 活動がその必要に即応して迅速かつ直接的であることから注目されているが、その首尾がどうしても世上の関心に強く左右される点で、政府の、とくに国際機関を通じての息の長い協力に取って替わるとは思えない。また警戒すべきこととして、政府の手の届かないところを補完しながら政策の不備を指摘し率先して問題を解決しようとする道をひらく活動は重要であるが、政策による歪みによって生じた社会的利益や公共性の喪失を緩和する活動においては政策の根本的誤りを示唆するよりも問題点を覆い隠し助長する結果になりかねないことの自覚もなくてはならないであろう。

パキスタンの地震ではパキスタン政府自体の対応の遅れも指摘されているが、特に厄介な国境紛争を抱えている国でなくとも貧しい国の懸念は、貧しさによる力不足の外にも、他国の経済的な援助や支援が政治的支配と無縁でなく、豊かな国の経済侵略に道をひらくことになりかねないところにもある。その点からすれば、国連を通じてのしっかりとした支援拠出をすることの意義は大きい。

NGO は民間の組織ではあるが、必ずしも開かれた公共的利益ばかりでなく、内実は自国の国益追求を目的としている団体もある。しかし当然のことながら人道援助と国益とはやはり常に一線を劃すべきであると思う。人道支援がひいては自国に対するその国の人の親しみを醸成する効果もあろうが、だからといって逆に国益のために人道支援をするとすると人道支援そのものも胡散臭くなり、時と場合によっては「人道援助」では埒があかないから制裁

だという風に 180 度ひっくり返って不思議はない。悲惨な天災、災害時の国際的協力や支援、援助は国益的狭隘な見方によってなされ評価されるべきではなく、国をこえた人間的で根本的な安全のためと捉えられなければならない。国益は自国中心のかつ排外的にもいえないのに対し、安全は自国を主体に据えてもいえるが、さらに本質的には人を主体としていなければならない言葉であることが違う。

8 月末のアメリカのハリケーン・カトリーナはアメリカの政権の土台を揺るがすきっかけとなり、イラクへの派兵の長期化と相伴って、今に至って殆どブッシュ大統領を退陣に追い込みかけているかにも見える。そこには軽視された貧富の拡大問題が根底にあり、人間の幸福社会の福祉に不可欠の安全理念に反した誤りが露呈しているのである。たとえ原理的に平等と前提しても民営化に伴う「小さな政府」の下の強食弱肉を是とする主張は根本的に決して機会均等ではなく、人種差別などの現実の矛盾が社会問題として現に、紛れもなく出来（しゅったい）しているのではないか。現在、フランスで起きている暴動も 11 月 9 日現在鎮静化する気配はないが、同様の問題である。

アメリカの政策の根本方針は実に強く国益によって動機付けられており日本でもそれを世界標準と認め是とする主張が目立つが、今度再編される世界中に展開した米軍のあり方をみても、それが常に他から利益を吸い上げるばかりの構造を世界的に推し進めようとしていることは否定すべくもなく明らかである。果してそれを今後も続けることができるだろうか。米州サミットは不首尾に終わっている。対テロとの戦いを看板にしてイラクに戦争をしかけ、一年前には圧勝で再選されたブッシュ大統領は今、一層多くのテロを作り出したと批判されている。短期で圧勝し平和をもたらすことができるという見通しの誤りは今明らかで、全うな識者達の指摘どおり状況は泥沼化しているといわざるをえない。兵は詭道であり危道であって、安全の道ではない、という。大きな過ちの後に辛うじて生き延びた平和国家日本は経済優先の背後にある私的利益追求の絶対化をこのまま推し進めるのではなく、ここで耐え（こた）えて真摯に真の安全の道をこそ探り拓くべく求めつづけるべきである。 *

安全学迸散(ホウサン)

*****第三回*****

辛島 司朗

この題でしばらく書きつづけようと思っている。安全探蹟（タツク）という言葉で記しているところであったが、かねてより系統的体系的整理を心がけてはいても願うばかりで、なかなか臍を固め氣勢を整えることができずに遅疑逡巡の中に日が過ぎていた。今回思い切って取り敢えずは、折にふれ時に応じて心の動くまま、村上陽一郎氏の文章にふれたこの機運に乗じて発機発想して、断片を書き留めておくことにした。そしてこの際、心覚えにすぎない文章であることを忘れぬように、敢えて自ら言い聞かせておかなければならないと思って、探蹟でも索隠でもなく進るに任せて記したにすぎない文であることの自戒を込めて、こう題することにした。

学にとってもっとも重要なのは学びの動機であるといつてよい。それは少し難しくいえば愛智の精神といつてよいが、学-問性をうちに含み、もしくは潜めている場合といつて当るであろうが、自存力のようにやむにやまれぬともいうべき内的行動力によって動かされているものともいえるであろう。英語で言うなら単なる learn から一步

進んだ study もしくは study 性を含んだものと言えるのであるが、学問は、「学-問」なのである。複数漢字の熟語、更には一字の形をなしている字の場合でも一旦は分けて一字一字の、もしくは部分部分の意味を十分にとらえた上でこれを合せ考えるのでなければならない。

また、自己同一的で静的な形、形相において見て取るままに切り取り切り取ったままにしてしまっただけでは「いのち」のないもの、息であり行の、そしてまた生きであるような「いきのいのち」としての生命を失ってしまう。譬えていえば、それはもともと動物と較べてみれば生命のないものと見られ勝ちな植物の腊葉（オハ）標本をみるのと同じことになってしまう。自然は自らに即ちおのづからにしてまたみづから然るべく生じては死し、死しては生ずるもので生死の繰返しの中に大きなもしくは固定的種的变化をとげるものである。よく知れば植物にしてなお然り、また微塵のうちにも極微のいのちが宿ることさえ知られるのである。学と学のいのちにしても同じであるが、この場合の学は出来上がってそこに現前する即ち present するだけの形のものではなく、変動躍動する変化推移の station としてのそこにも根底にある勢いを見るのでなければならない。静止の相に則してみればその躍動変化の勢いは自存力というものとして認識されることになるが、静止の中にも力を見ているわけである。

むかし、若い頃まだ大学生にならず「哲学」を習うよりも前のことだったが、アメリカ人の英語などで、in my opinion といっておけばよさそうなところで in my philosophy と言っただけのけるのにやりきれないような反感をもっていたことがあった。哲学はそれが「科学」science にとって替わられていると思われるのであるが、まづ大いなる価値を含むものとして出来上がった形に則しもしくは「から」しか考えられなかったのである。

しかし考えてみれば、opīnāri を通じて optāre からくるラテン語由来のこの opinion の語は option や optative 即ち希求法にも通ずるものであって願いや望みに通ずるところがあり、したがって事実認識にかかわる意見、見解というよりも、理念までいかなくとも価値観やそれに基くような評価と深くかかわる語であって、時にはその人その人の人生観などに深く根ざしていることもあって当然である。恐らく philosophy を口にするのを避けようとする誤りは philosophy を「哲学」と訳し、深淵な学として祭り上げて怖懼怯懦してしまう日本的心性にあると言わざるをえない。皮肉なことに本来哲-学と訳されてしまっている philo の sophia に対する添加は、思想史上で相対主義者と目される sophist の客観性にして初めてもちうるような絶対化的ともいえてしまう恐れを逆に伴う結果を避けようとするもの、追求してついに求めうるとは限らぬ悲壮なもしくは謙遜な姿勢のものであったのだが、ドイツ語では Fach-wissenschaft といわれてしまう science の Fach 性、言葉をかえれば、ラテン語由来の science の語のうちの分析にも通ずる scīre の意味を忘れてしまっていると言わざるをえない今日の科-学にみるような神格化に近い逆説的自大の結果を産み出している。外国の言葉に対する訳語択びや名づけにおける意味付与に関する深刻な反省の欠如がつくづく悔やまれてならない。

多言を弄するような繰返しにくどさを恐れず言わせてもらわなければならないが、他方で遮二無二の、したがって日本にしか見られない日本固有とも言え言えてしまうような西欧化的模倣と追いつきに徹した「後進国」日本では明治期に何にでも学をつけて訳したがった傾向が見られるが、今では high tech に並べて low technology といわれてしまうのは勿論、科学や科学的所産にかかわるもので技能と区別される意味での技術、その意味での科学にもとづくような「科学技術」でありさえすれば、engineering を工学とし、同様に philosophy を哲学と訳してきたのもその伝であって、philosophy を哲学として「学」と訳したからといっていわゆる工学を正に「工学」とはいつでも、工学の背後にある「科学」を睨んで言うような「学」でも哲学というときの学でもないのであると言わざるをえない。

なお付け加えていえば、哲学と工学は純粹科学と違って現実世界において役に立つものとして追求するという点で共通性を持ち、他方で哲学と科学は理論的な追究をこととする点で共通であるともいえる。科学は工学に直接するものであると同時に哲学に包摂されるものでもある。敢えて言えば、新来の外国語によって外来文化を急速に取り入れようとする勉強による動詞的学とその内容を形成する確固たる権威をもつ名詞的学として捉えた Strenge -

wissenschaften の科学的厳密性を含んだ意味のものであるとあって差し支えないであろう。日本人は学のうちの「学」、動詞的学をすつとばして、いきなりもつぱら名詞形の学として、体系的でかつ形成済みのものであるかのように権威を備えたものとして瞠（ま）る即ち目を見張りみるのである。実は汲々として急遽学びとろうとして日夜暇もないぐらい勤勉であったのが、それにもかかわらず動詞的学を卑くみて、西欧崇拜の姿勢のなかで学の研究を尊し、誤解のないように言い直せば研究でなく「学」をこそ尊しとしたのである。そして伝統的歴史性を忘れ自発的内発的な形成を捨て、自前の現実性をすっかり無視してしまったと言わざるをえないのである。

「学びて時にこれを習う、悦ばしからずや」は論語学而第一の有名な冒頭劈頭の言葉であるが、「時にこれを習う」のは現実の中で実際に経験を重ねながら体現体得してゆくことに外ならないのであることを決して忘れてはならない。言ってみれば学には「勉強」も大切であるが、深みと高みが期待されるのは「工夫」としての学であってこそであろう。学にとって体系性、論理性は究極的なものと言えるが決して本来普通のものではないと言い切つてよい。

学はもと學と記された字であるが、のちに教となる斂と並べてみれば、学を授けることやものと受けることやものとの別のあることは言うまでもないが、教に対して学は受容し自らの心を養い、行における技に習熟し術知を加えて能を一層練り研（シガ）くことである。自ら進んで学びをするならばまた別であるが、学ばせるに教鞭を用いなければならないとすれば文字通りにこれに教えこれを導くのが教であることになる。そして外力による強制が必要であるとすれば、斂の支は単なる動詞記号と解して済ますわけにはいかないことになる。

ここでついで乍ら棒についての考えを少し述べさせて貰えば、棒は腕と腕力の延長拡大であり、また対象についての基準的尺棒であるとともに、同時に強力かつ強固な延長的繋ぎともなる。学の本字を分解してみれば、彡と一とからなるが、そのうちの一は宀のことで、子を収容する堂屋の屋根のことであるとされるが、後に上から⁴即ち両手の加わった形とみられ育て上げることを示すものと考えられるのである。教鞭に通ずる棒は不可変的であり、従ってまた不可侵的でもある既成の成立権威とその象徴となっても不思議はない。

今日、学を言うときもつぱら科学（science）をもってし、既に明らかであるように学問をいうとき勉強と研究の語をもってする。そのことについて、かなり煩雑な説明になるが、少しここで立ち入りを許していただきたい。学問と並ぶような言葉と考えられている研究についてみれば、その究は穴と九からなり、局限にむけて問いつめる、問い続けることとあってよい。穴には対象も道具もなく、場とそこに働く力があるだけである。これに対して研は石と开からなる字であるが、その場合の開は平らにする、そろえるところから磨き整えることにもなると考えられるが、何らかの特定行為に限定されている働きであり、この場合はそれが石などに関することとして示されているとすることができる。

石の代りに女となれば妍となり、妍を競うことにもなるが、成果への過程というより並び立つような或いは絵に並ぶような結果的成果というべきずれであると考えられ、また研鑽と熟するときの鑽はキル、ホル、ウガツと訓まれるように、もともとある種の行為への限定を示すものであるが、特に対象を示しはしないにしても、穴のような虚ではなく働きかけるべき固い実を備えた場合であることは確かである。

これが讚となれば、肉体、身体的な行為ではなく、言によるにすぎないことになり、賞賛の対象はあっても働きかけの対象を明らかに含意するものとは考えにくい。その大本の賛即ち贊は賛成などの語をつくるが、広く認められているように神の佑助をもとめることには違いないが、私の思うにはまたそれゆえに天佑ばかりでなく人がたすけて成就させることを含めて考えてもよい筈だ。他方で、白川静は研の開について平直の意があると言っているように、また精研、研鑽と並べてみれば浮かんでくるように、いたる、きりわけること、またそのように努力することと考えてもよからう。そうすれば研の字意から平らかにする、揃えるのようにまた、美しく整える選や撰の意をみることができる。僕ともなれば具えるにも、揃え備えることにもなりうるであろう。妍の意味をそこにみること

もできるかも知れないが、研の本意は自らなすところにある。メイクアップ・アーティストに顔をつくらせるとき、確かにつくらせてはいるが、研を為すのはメイクアップ・アーティストの側であり、妍を競うのはさせたものではあってもその妍は既に動詞性を失っているのもであって、出来上がり即ち妍を成すのはモデルもしくは雇い主となった女性である。この研についての二義は学のもつ二義に匹敵する。更にいえば、「研」は動詞であり不定形動名詞であるのに対して、指示名詞的名詞は「妍」となるのである。そしてこれに倣えば、この間の別は習い学ぶ対象となる単なる学と、問いを付けて探究し追求する行為をいう学問と言い分けられることになるのである。

さてそれはともかく研究の研には対象への働きかけがなくてはならず客観的な言葉であるのに対して、「勉強」の言葉は客体とのかかわりを切り離した上で全く主体側の努力のみをいうものである。工夫は日本では工事、特に烈しく体をつかう土木工事などに携わる人をいうが、禅学などに用いられるところはそうではない。藤堂は「物事をなしとげるために、手段を講じたり思慮をめぐらす、またそのような考え、努力。……」といい、俗には暇や時間をいうと指摘している。

これに対して白川は「工作上の思案をする」ことと言う。そして白川は工については「工具の形」と言い切り、巫をあげて、それが人の工をともない、備える形であることを示す。また工人は工夫のことであるが、『字通』の夫の項 p1357 で「夫は勞務に服するもの、その管理者を大夫という」といっていわゆる人夫のことであることを示す。そして言い添えておけば、続けて「夫人とは『夫(か)の人』、先生を『夫子ふうし(夫(か)の人)』というのと同じく、婉曲にいう語法である」と記す。つまり今日風にいえば、恋人のことを彼氏彼女というのと同じ言い方になるわけである。白川は言わないが、夫婦の関係からみて「夫君」という場合、「夫」は必ずしも人夫や工人に限るわけではあるまい。小婦(コメ)に近い意味での婦と並ぶ夫婦の夫ならいざ知らず、夫妻の意味での婦に匹敵する夫なら言わずとも大夫にあたいすると知りうるであろう。そもそも「夫」は大に一が加わった字である。「妻」と同じく加飾され貴ばれた姿を示している字である。恐らく、工夫は首領や指導者のなすところであり、工人をいう工夫はそこから転じて対人名称辞となったものであろう。

学の熟する語に「學術」や「学芸」もあり、また「学養」「学識」があるが、ともに前字が後字を修飾する語であるのに対し、前の二つはそればかりでなく動詞目的語の句を作るものとも、学と術、学と芸のような並列するものとも二様にとることができ、従ってまた學術と芸術のような並列として考え、たとえば、術の二つとみることもできる。もっとも学識も、智識や良識常識、さらには標識知識と並べてみれば、必ずしも学養の仲間うちに止まるものではありえないであろう。

もっぱら動詞+目的語の二字語とみられるものには、学文ばかりでなく学理もあり学道もある。学理にはいわゆる屁理屈や俗説に対して、一般に認められもしくは受け入れられるべき理論論説としていう場合もあるが、学道と並べて併せみるとき理のあり方、理の成り立ち方を学ぶということになると言うことができ、その上で場合によって学的営為に裏付けられた論理または理論になりうるというわけである。

いま学と関連させて文と理と道の三つをあげたのであるが、まづこれを文理と道、更には理と道もしくは文と道理などの二つに分けてみるのが肝要かと思われる。中国伝来の「文」の意味は広い。中国でいわれてきた文学や文献などの語にみるのは今日の欧米語の翻訳としてのそれらとの比較を遙かに超えるものといってよい。しかし、その文の原意を尋ねれば、恐らく文身の上に見る「文」がそれであると思われ、従って文は本来、一身上とは限らぬまでも身上のことであり、質に対する文としてこれと別に、他物の上にあるものや更には抽象的に取り出されたものを表すものとしては「紋」Emblem を言うことができよう。そして文が字となり、また字が集って一箇一箇の複合文字となり、一系の纏りの文となり、それが大きく纏って纏った文章となつては文が、一身的身を離れて社会の有となって社交社会的存在となる。

極端をいえば刺青文身が身体から着衣に転じて紋様となり、特定の紋となつては着物からも離れて象徴的に紋章

となることを考えてみれば、文とはみづから発してみづからを飾り、広く対自的に文思装飾を言うに至ると同時に、対他的にも拡がって文様、紋飾ともなり、即自対他的に紋章ともなる。一体をなしている複合文字や文章を一体化一系化させているものはそのうちに込められている理に外ならないであろう。理は文の中から析出され抽象化客観化されたものとも、文意を成立たしめ文を理とせず正に文とするもの、文に作り上げるものともいうことができよう。勿論このような文は記号であっても象徴であってももはや決して単純なものではないことになるが、分析分解を経ることなく即事即刻に興感することになれば、理をこえ全的に動かして情を発せしめる。

今日文理といえ、文は人文などと熟して使うように主体的に直接するものごと、理は客観視され間接化され対象的にされ、論理化され物理化学的にスケルトン化されたものといつてよからうが、言ってみれば、もともと文は表れるままに丸ごと即ち全事（まるごと）にもしくはまるまる全然に言うのに対して、その意を成り立たしめることもしくは成り立たせるものが理であるといえるようにも思う。いずれにしても文理は一旦は別にされながらも併せて学問領域の全体をカバーする語として用いられている現状に照らし、更には道に対するものとして考えられるとき、一体のものところ考えられるべきものであろう。学道に対して、学文、文理は一つことといつてよいであろう。恐らく身にも心にも道を学ぶことこそが大事なのであるが、遂にそれは大道に達しなければならず、理を学ぶのはその前段をなし、また理解を助け知に達せしめるものであり、学文は結果の荘嚴のためといつてもよいであろう。

ところで、kennen は können に通じ、「知る」こと、知って「智をうる」ことは何事についても決して欠かすことができない。しかし知は必ずしも知識ではなく、智は知識的識別に限られないどころか、いわゆる分別智をこえて識をこえ言をこえた事ではなければならないとも言える。プラトンが弁証と並べて突然、卒然を重視するのはこのことではあるまいか。そして更にいえば、通常「突然」と訳されるその *aiaphnēsis* は嘗々たる弁証的努力の果ての了り締めくくりの意を含めて卒然と訳されなければならないものであろう。そしてまた文は理を通じて流れ理を通じて解されるばかりでなく、情意の形で情愛となって伝わることもあるし、美的になって美気美妙に衝動し迫進（はくさく）することもある。

学は特に動詞として働く場合、知識によるもの *logos* によるものと言うばかりではない。学が学芸と熟する場合、学と芸、学や芸などの名詞の連語であると考えられる。技の芸に対して学の術と並べうる学の芸として学芸と称することもしくは學術と芸術の術を省略した縮小形と考えることはありえても、「芸を学ぶ」のように「動詞+目的語」的熟語と考えられるべきケースは少ない。このとき芸は学とははっきり別であるが人間行為であり、多くは行為結果の蓄積とか累積結果的成果である点で、共通して一語にまとまっているものと解される。勿論技の芸に対して技の学といおうとすれば、明治以降の現行の日本語では工学となるわけである。なお先ほど學術と芸術との連合と考えるようにいったが、普通にはそのような場合には「学問と芸術」という言い方になるのが実際であることを付け加えておかなければならない。學術を芸術を抜きにしながら学問の方だけを指す言葉としては実際には言わないと考えられるのである。

しかし、学は生活現実もしくは生活実践から一步退いて反省し、学道のように反躬（ハツキョリ）に限らぬまでも道理を学ぶとは限らぬとも、行を抑え或いは行間に展開するものとして志向を内に反えし、内において反芻することであり、その成果である。これに対して、学とは別のものとしてまとめられる芸は実践実行の成果であり、技能のような一身一体に即したものでなく、またすべとしての技術のように術の種類に応じた物言いでもなく、学に対応するものとして、各人に蓄積されて向上した能を、人身を離れた客観的にみたものである。これを単なる技能に比して遙かに客観性を与えた上で捉えたものとしたのが技術としての芸術ということになると考えられるのである。

ここで芸や術や能について少し詳しく考察しておくべきであると思うが、能は個々人の態や能作者の所作所産として表れるべきものであるのに対して、術は社会の中に述々とい行われてきた実事求是の蓄えられたものといつてよい。能は水中もしくは身中に含み含まれる能力或いは能もしくは能力をもったものといふべきであろう。そして芸

は芸術とも芸能とも熟するが、少し遊んで言えばそれらは特に後者は蘊奥に通ずると言うことができる。芸は「ウン」の音でよくわからないが苜蓿（うまごやし）或いはヘンルーダ（芸香）をいうらしい。その草田に踏み込まれて死を身に復しうる力を秘めているともいえるが、藪やその下に云を加えた藝の当用字として用いられると藝術、芸能のこととなるのだが、芸から草冠を去れば言うこと、云々することをいう「云」になってしまう。

省略された執に云を加える代わりに烈火を加えれば熱となって温に通ずる。芸（ウ）の動詞は「くさぎる」もしくは乾いて「きばむ」意になったが、「芸々（ウウウ）」として生い茂ることを言って逆の意味の形容語になりもする。藪の芸は園芸ともいうように動詞として「うえる」ことや「うえ育てる」ことをいうが、名詞としてその「わざ」となり、その業の蓄積となるのだといえる。ついでに言えば、熟は「に」「にえる」などして柔らかく変化することであるが、藪（ゲイ・ねっ）や熱（ねっ）はそうする力また焼く力としての熱もしくは熱気のことになる。

執と孰は左が壘と享の違いである。壘は土に関する字であることは明らかで、陸にみるように土くれ、土のかたまり、土のもり上りをいい、種のように土壌にかかわるものをいうのに対し、熱のほか塾などの壘は土築の塀わきの堂舎などをつくる字であるのに対し、享は「とおる」即ち火などが中までとおることをいう。享受のように「うける」ことのほか、共通の丸はまるくまとまり集まりまとまって一つになっている、一体化しているものやことと考えてよかろう。芸能藝術の芸は蘊奥に通じ、雲の如く湧く気や力をいうことになり、蘊が蓄積や培養によって出来上がった内容内実であるのに対して、芸の示すものは行為そのことであり、また行為の力というべきであろう。なお焔は器中に暖気のこもりこめるさまであるのに対して、蘊は蘊蓄ともいうように、そのようなものとしてたまり蓄えられたこともしくはものをいうと考えられるであろう。

芸の種類を大道芸とか座敷芸、隠し芸、旦那芸のようにではなく、一身をこえて世の中に伝えられ蓄積された芸そのもの即ち術に即してその種類をいおうとすれば、芸術の語を用いるべきであるかもしれない。その場合大きくわけて書や絵画、彫刻、ひいては建築、土木などの造形などの視覚的なものに対して、音楽のような聴覚的なものと、それにすぐ連動する全身のかつ反射的な躍動反応や運動反応として舞踊や舞踏が分類でき、他には話芸とか腹芸があり、また mimicry のような寄席芸にみられるような娯楽性をめざすものもある。寄席芸は大道芸のような驚異を伴うものというより、表現され表明された芸人の練達した巧妙さを喜ぶ面の強さで区別すべきであろうか。その点では技術、芸術というよりも、やはり技能、芸能の語をもって語られるにふさわしいものといえよう。ここで技能、芸能のことをしばしおいて、芸術を学術に比べての概念として考えてみよう。

「哲学」的教養の身につけ方につきまとい勝ちのような、そんな総合的客観性に呪縛されたものであるかのように考えなければ、概念は何も知的論理的なものにかかわるばかりのものではないことは容易に知りうる。たとえ「知的なもの」に限るとしても論理にはかかわりなく、従って現実性とかかわりなく各個人、各界各領域それぞれに共通の、しかし逆にいえば、そしてまた、各宗教にみるようなたとえ非現実であろうとも直観的理解もしくは信念のもとづく、従って匹夫においても強固な理念として働くものも、客観的である科学のように、理性的ではあるがしかし理念とは全くといってよい程かけ離れた各人各科バラバラに自閉的で全的統一性を無視しうる信念もありうる。観念的という非難は信念に限らずこういう場合に世間から投げつけられるのである。

この立場では科学そのものの立場をとるところに無批判な信念をみることはできても、その内に入ってはそのような信念はどんどん排除され、狭い範囲の即物的いわゆる「実」験と称する経験にのみもとづけ、またもとづけようとする理詰めが切り拓かれようとする。

日本では術や技をいうのを嫌うかのように好んで「道」をいうのを喜ぶ。何故かといえば技と比べてみれば明らかなように、少なくとも術には、技とは違って広汎な客観性普遍性がなければならぬことになるのに対し、さらに術とは違って道といえればいいとなると、何か技の発揮で事たりてしまうことにならぬもないという便利なところが出てくることになる。

唐以後の俗語で「説道」という場合、道をとくこと、閉ざされて未開の場合には道を拓き開くことを言うことになることもこの際考えておかななくてはならないことになる。その際にまづ知らなければならないことは、道は通じてこそ道であるが、他に通じて社会的な道をひらくもっと身近、手近な方法は何と言っても口を動かし言葉を用いて言うことであろう。だからこそ、道は俗に「言う」ことになって日本語でそう訓まれることになるのもまことに肯べなることかなと言わざるをえない。時に応じて人に関してよく通う即ち通ずるその学の客観性の意味が加われば、「学」の非直証的直観性が妨げとなりがちであるにしても、しっかりと通りうる逞しさが加わるといえよう。

それが「人の道としての道」をいう場合などは目に見えるような道であり路でもある道でなければならないということはない。人と人が友ともなり助け合い心が通い合い、利に共利性が相伴うのでなければ、社会の形成が失われ、バラバラにぶつかり合うばかりの集団になってしまう。しかしその共生の中に、共利効果が現れ出てくれば、結びつきが生まれ纏まりが発生する。人と人との間に路が通じることになるわけであるが、そのことによって人は人間の中の一員となり、ついには一人一人の人間も独りのままに見られず、本質的に人間存在者としてみられ、ついには「人」と「人間」とは同意語としても使われることにもなってしまう。

ここで路と道との対比から道を見ておかなければならないが、径即ち徑には莖（＝莖）や経（＝經）にみるように縦にとか上下にの含意があるが、細くはあつてもとにかく直径半径または直情径行などに見るように、根底には真もしくは真つ直ぐの意があることを見逃してはならないのに対して、道は首を吊るしたり埋めたりして、邪を祓除（ふつじょ）して除道する、逆にいえば除とは邪を払い正につかしめ、邪道を正道にかえ門に入りまた行なつてゆくことを言うことになる。道は径がむしろ直にであるのに対して、価値にかかわりながら曲がれ外れることのないことをいうと考えてよいだろう。径は神社や仏閣で捲いたり迂回したりしてゆく女坂に対して、短く急に直行する坂もしくは階段である男坂のようなものを考えればわかりやすいであろう。男坂のもつ価値は早くゆけることであり、女坂の価値は疲れずに楽にゆけることである。みちは路もあるが、路上にあることは除道ではなく途中途次などと熟する途に変るが、直に対しては徐々に当たることになる。徐（おもむろ）に道をひらき路を設けるのは、路を拓き道を行うことにもなるが、とにかく通じさせ通うことにもなる。

それは丁度、記号に徹する最も論理的な学術である数学で数式を解くときに、式毎に式中の定数や係数を限定し、未知数や変数について必要な条件づけをすることを定義と称するような個別的、時には便宜的な性格をもっているといつてよかろう。しかし、これは学術内でのあり方の違いであるが、芸術における概念についてみておくのは先延ばしにして、少し疲れたので道を急いで、取り敢えず「道」そのものについて考えておくことにしよう。

<つづく>

古稀虹の途方にくれている日々

……農大と日本国と人間世界をすべて一つにして……

<2001年6月16日>

於・後樂園涵徳亭

× × × 最終回 × × ×

古稀虹の独白

辛島 司朗

さて在職中、人文科学的哲学ではなく教養としての哲学をひたすら説いてきた教養担当教師だったが、授業外にも批判精神を口説いて評論家と綽名され、黙しては極く少数の学生達とばかり接していて、外から非常勤と非難排斥されてもきた私だが、今の今そこから解き放されて、これからどうするか、どうなるのか。

さて話がどえらく広くなりすぎたが、とにかく教員となる前の私の関心の的は形而上学的存在論であり、「ある

こと」「あるべき」姿の探究であった。また初心に帰って、批判を自らの学問の方法としながらそこまで戻るか、中に籠もるのが、どうやら性になってきてもいる上に、哲学者の孤高を気取らなくても、どうやらそれが本性のように想われてもきた。しかしそれにしても、アイデアの観想を事とするにはこのところの現実内外ともに恐ろしい様相を呈してきていて、そんな生活の枠組みさえ生半(マナ)なことでは済みそうになく、そのための段取りにさえ、当然の透徹した洞察に加えて、余程の覚悟が必要だ。そこで、むしろ静かな書斎の思索を捨て割り当てや訪いを待つのもやめて、ソクラテスさながらにいわゆる実社会の中にさ迷い入って、果敢に文明批評や警世の働き、実際の活動を展開すべきか。しかし昔から市井のソクラテスの運命は明らかだ。それに、カント的にサロンの楽しみのある生活の享受も悪くはない。

麒麟も老いては驚馬に劣るといえるが、悪魔的な技術の呪縛を解く救い主ヘラクレスも老いてなお途方にくれたり道に迷ったりするのだろうか。しかし、そもそも豊年の祈りは月日との永い継続的戦いの累積結果として結実し成就するものである。

我が身の来し方を省みれば、レッドページ・ストやあの攪乱的メーデーも、また後の 60 年安保騒動もどちらも休学中の身の半ば文字通りの「高み」の見物に行っただけであったし、70 年安保の騒擾には教職の身の連日深夜に及ぶ対策会議に悩まされてはいたが、テレビ観察以上には、東京薬科大学での爆薬隠匿の教壇の上での知らぬが仏の講義をしていたり、航空高専で学生達の終夜討論に付き合わせられたりしていたなどに止まった。60~70 年のその中間の「立地センター」で日を送っていた二年に満たない短い間には知る人は知る風変わりな大ストライキを中心になって組織したりもしたが、その 70 年安保の東大占拠籠城戦の先駆となったような過激な働きは、小学生の頃戦争中にやってのけたささやかなストライキとともに、例外中の例外であった。ただ執行委員の一人に加わっていた程度で勿論行動は表立って先頭を切ってなどというものでは決してなかったが、その激しい経験を通じて知ったのは、70 年安保闘争のあとの清水幾太郎的感懐に似るが、中途半端なイデオロギーによる運動とか実践とかのばかばかしさであり、主導権争いの中の平然たる欺瞞や浅ましい裏切りや哀れな程の信義の欠如についてであったし、また徹底的合理性の追求は殺さないで済むような人を殺しもすることだというこの世の実相でもあった。そのようなことから、農大では飛ばないどころか本格的には鳴きもしないめめずのぶつぶつのつぶやき程度で四半世紀余を過ごすことになった次第であった。しかし農大に在職の間、いわゆる高度成長経済社会の中での農家の後継者の嘆きは何やら身に沁みて分かるような気もしたりするようにもなったが、それが後をひいてか、托寄の果ての身の習い性となってか「重くも大(杵)し」という農大の使命の将来についてもいま猶思い及んでしまうような無聊の懐いを重ねる日々でもある。

エピローグ

憶えば、農大は、南側に馬事公苑を控えた世田谷通りに面して、双手を挙げて受験生を迎え入れるかのような形に正門が開け、真正面に近く立つ本部棟と一体になって、まず外来者に好ましい第一印象を与える。踏み入れば、高く天を指す風の設えの空間を通過して、公園風に作ったペイブメント敷きの本部棟までの曲線の道が、正面から入って玄関までのアプローチという趣きであるが、その広からず狭からずの広がりをおいて前面に見える本部棟の赤レンガ風のタイルの壁面には小バルコニー風出窓が一面に並べ立てられていて、景色に軽やかに重量感を与える。そしてその一階の中央部は二、三段の階段で高められていて、道路のように車では突き抜けられないが、しかし凱旋門風の突き抜けになってその見通しの奥に図書館の前面を限りとして同様の景色の続きを控え、空間に広がりを与えて伸びやかさを生んでいる。そちらの方にはベンチなどが配置されて、憩いのスペースの性格を備える。その本部棟から図書館に向かって右側一杯に長く研究棟である建物が建ち、左手には一号館と十三号館が横並びに建ち、その中央が緩やかに囲まれてキャンパス中心部の落ち着いた空間になっているのだが、さすがに造園学科を一つの看板学科としている農大らしさが肌で感得される。看板と言えば、正門の大谷石の大柱の門柱に掛けられた

大標札は棟方志功の特色のある揮毫だ。左手のその一号館は長いバルコニーを此方側に向けて上下二層にもつ四階建てであるが、その長方形の口の字形の長いほうの反対側もピロティーの突き抜けになっていて、中庭を間に挟んでその先にまとまっているキャンパス西側の新しい別空間とのつながりをもつけて閉塞感を防いでいる。

この正面から図書館に至る前庭と本部と図書館の間の中心一帯は、本館の裏側キャンパスの西側に最近造られた百周年記念講堂と、それとセットになっている十八号館とのその間に白白と開けて緑の気を感じさせない都庁・都議会間の広場風の味わいをもつ別空間新しいサイトとともに、おそらく大学内でもっとも配慮された部分であると思われるが、その中、今や最も古い建物群である一号館の中庭を挟んで、その前後のピロティーによってつながりを与えられている二つの空間は最も金をかけて念入りに設計された空間でもあるようだ。

これに対して、その本部棟落成後のその跡地に、つまり正門を入れて左手に細長く、つまり世田谷通り沿いにつつましく立て替えられた建物の一、二階が数年前の大学大綱化にもなって解体解散させられた教養課程の位置付けられた場所であった。それ以前の床が抜け窓ががたがたで、鳩が部屋に自由に出入りするような木造の建物から見ればうれしい限りの移転であったが、二重窓の約束は反故となり、南側の窓のブラインドも長い交渉の果てにやっつけてもらえる始末であって、元の研究室はボロいながらも本館の世田谷通りとは反対側に位置していたから余計にか、10号館の自分達は防音壁の役割を果たしているのではないかとの疑問にさいなまれるほど、移転後しばらくの間は本が読めないほどの苦しみを味わった。

そうした中での当事の新本部棟の際立った立派さと、厚木農場の学生宿泊所の赤絨毯はきわめて印象的であった。数年間留まるお客さんとしての学生を大事にしていると言うべきなのか、学校法人の財政的担い手を大事にするということなのか分からないが、しかしそれにしてもその本部棟とそこに納まっている昔の怪しげで出鱈目であった学生課との働きとを対照すれば、意外の感をさえ抱かされたのも事実だった。同じ10号館の三、四階に入っている短大の実験室からの果てしなく繰り返される水漏れには悩まされつづけ、苛立ち続けたことも忘れられない。朝来てみると、床が数センチの海となっていて、木製の本棚とその中の最下段に並べられた本がすっかり水を吸い上げてしまっていたこともあり、酸のせいアルカリのせいか布地のものが長い間にボロボロになったりもした。改善を申し込んでもどうにもならず、改良の希望なぞまるで取り合ってもらえなかった。

しかしそれはもう「今は昔」のこととなったようだ。積極的な姿勢の歴代の理事長と理事、それにきっと校友会の努力のお蔭であろうが、三十年来の実感は農大の施設はどんどんよくなってきたし、それなりに魅力あるキャンパスを作り上げてきたと言える。当時のことにしても特に農大はひどかった、三十年前の雨で泥濘と化し、緑にも乏しい荒涼たる態様と比べれば正に天地雲泥の差としかいいようがない。また大切な内容の面でも総合研究所の設立と以後の様々な拠点校的存在への発展はなかなかのものであった。

しかしその反面の率直な感想として一番痛切に感じ是非改めて欲しいと思うことは「伊勢の瓶子（ハシ）は酢瓶（サカメ）」であっても「平氏にあらずんば人にあらず」ということ、それが下天（ゲテン）の姿であるのかということである。公共的の大学は公共的存在と言うより私的財産であり、企業会社同様にその事業と財産の正嫡の後継者による継承発展が学校法人の第一義的使命なのかという疑問さえ時に頭をもたげさせることであった。特に教養課程なるものはいわば単科大学では半ば当然に雇い兵の寄せ集め集団であって、無用無駄な組織であるどころか、むしろ危険なガンのたぐいである異教徒 pagan（ペイガン）集団のようなものであるらしいとも思われてやっとな腹の虫も収まった次第であったが、遂に教養というカリキュラムそのものも完全追放が計画されて、辛うじて「教養的科目」が替りに新たに考案されたのはまだ偉いのか、ポピュリズム的仕上げなのか。しかしながらそれにしても専門の関係には外様の先生方の中にも優れた方がいないわけではない。率直に言って、嘱託教授にも正に嘱託するほどの先生方がいるにもかかわらず、十分に働いてもらえないのは何とも残念なことではいかという訝しい思いにかられることも少なくなかった。システム上の新工夫が必要なのではないのだろうか。

国立大学の独立行政法人化は社会全体のその方向への更なるレベルでの第一歩にならなければよろしいがとい

危惧も抱かせられる。しかし恐らく凡ゆる組織に伏在する経営的な事柄は、サラリーマン的家庭での貧しい育ちの私などには到底理解できないものなのかもしれない。プロレタリアートはそういうものなのかも知れぬが、しかしそしてそれはプロレタリア革命に限らないが、「革命的」改革というものが宮廷革命は別として何時でも何処でも殆ど失敗し変質してしまうのも基本的に経験が乏しい上にそれまでの経営の詳しい know-how に欠けて、適切な方策が得られぬ以上は致し方ないのかもしれない、たとえ少々ことがわかってはいてもどうにもならない、それが世の中というものであるのかも知れぬ。欲求欲望にはさまざまなものがあるが、とにかくその「欲」こそいのちの活性要素なのであり、しかも悪貨が良貨を駆逐するように低きに流れるのがこの世の現実的経済に外ならない。しかし奇貨はもちろん居(オ)くべきである。窮鳥は獵師もこれを撃たない。ましてや既に懐中にある、正しくは組織体中にある鳥は大いに活かすべきではなかろうか。逆に石なお叫ばんという言葉もある。

郷党の心を失うことなく、しかししかもなおその情に拘らず、open に広く開けた公共心も失われてはなるまい。郷党心も実は公共心の端緒なのである。党派的排他性は利己性への墜落に連なる。公共の「よさ」を正しく認識し、それを「よし」とするのでなければ、市場経済と科学技術のもたらした利便のその反面の、グローバルな環境問題や普遍共通で深刻な人道問題の弊害は解決しえない。「性善良知」を認め、「八条目」を否定するのではないならば、書は海外にまで博捜すべく、文英は広く見出さなければならぬ。総じて東アジアの勁さがそうであるが、就中、明治以降の日本の繁栄は、残念ながら途を誤り道を外してしまったのであるがそれはおいていけば、野に賢を遺さぬような正しい意味での学歴尊重にあった。今後将来もまた改めて賢を尊び広く衆知を集め市場郷党の枠をこえて聖賢の声に謹んで聴くとともに広く古今東西の意見を聞くべきであろう。

日本に大学の数は、大学の冬の時代が言われ、既に吸収合併のはしりもありながらなお益々増えつつある。大学教育事業もやはりまた「挙げてこれを天下の民に錯くべき事業」なのではない市場経済の申し子として、一ケの企業体であり、市場動向に従ってチャレンジされ、その動向に従ってまたそれと運命をともにせざるをえないのであろうか。そして欲望欲求野放しの laissez-faire を市場経済は遂に人を食ってこれをゲルトに鑄造しかつまたそれをエネルギー源としてまで、続け、果てしなく拡大再生産しつづけてゆくのだろうか。今ではガンも不治ではなく、エイズにも対策が立つようになっているのである。マネタリスト的経済観は正しくその意味をとらえ直さなければならぬが、倫理喪失時代の古典経済学は市場主義とともに排除され葬り去られるべきであり、それはまた人が本心にさえ立ち帰れば可能であるように私には思われる。

(完)

「古稀蛇の途方に暮れている日々」掲載の終了にあたって

この文章は辛島司朗氏が東京農業大学を定年退職するにあたって執筆したものです。2001年6月16日東京後楽園の涵徳亭においてごく内輪に行われた古稀の祝いを兼ねた退職記念会において感懐を述べ、発表できなかった分を後日元学生の皆さんに配布したものです。執筆から5年近く経ったのに、何で今更、それも一大学農大に関する文章を、と思われた方もいらっしゃるかも知れません。しかし、大学改革が迫られている今日、農大ばかりに止まらず、多くの大学も似たような課題を抱えて、改革ばやりのいま、教育についても経営についてもなかなか難渋しています。大学のことに限らずこの諸改革がこのまま進められていってよいのでしょうか。多分読みおわってのご感想に5年近く経った今でも少しも古くなっていないということを発見して驚かれた方も少なくないのではないのでしょうか。まだまだ当時は多くの人にとって状況ははっきりとはしていませんでしたが、現在、世界的に見てもまさしくここに書かれた諸問題がはっきりした形で表面化しているところだといえます。これからの文明のあり方を考えていく上で踏まえるべき問題を多く含んでいると考え、また、なるべく事が明らかになる前から事態の先行きを見透す力を養うことこそが安全思想にとってもっとも重要な態度でありますので、6回にわたって全文を掲載させていただきました。この機会に安全についての十分な議論が盛んになれば幸いです。ぜひ皆様のご意見、ご感想をお寄せください。 <編集部 N.N.>

はじめに

観光であれ商用であれ飛行機を利用して人々が国内外を旅行する機会が大変多くなってきている。

飛行機に乗り込みシートベルトをつけている間に大半の人が思うことは無事に目的地に着いてくれということであろう。尤も、統計的には無事に着かない確率は最近では大変に低く我が国では 100 万回に 1 回程度以下(万が一にも起こらない確率)となっているから信頼しきってそのような思いを抱く人も昔とは異なり減ってきているかもしれない。

無事に着くことを妨げる要因としては以下のようなものがある。

- 1) テロ・ハイジャック
- 2) 機材の故障(機体の損傷、コンピュータの故障)
- 3) 気象(乱気流、嵐)など

このうち、テロ・ハイジャックはセキュリティの問題で別の話、また機材故障は別の機会にということで、ここでは乱気流や緊急回避行動による機体の動揺に対する「客室安全」の現状と課題について述べる。

機体の動揺の原因

飛行機に乗っていて上空で時折悪路を車で走行するときのような上下左右の揺れに遭遇する。これは乱気流に遭遇したためであり、多くの場合、操縦室からのベルト着用サインによって事前警告される。しかし、乱気流や機体の動揺にも以下に示すように様々な種類がある。

- 1) 前線通過に伴う乱気流
- 2) サンダーストーム(嵐)
- 3) 山岳乱気流
- 4) マイクロバースト、ダウンバースト
- 5) ウインドシア
- 6) 後流渦
- 7) 晴天乱気流(Clear Air Turbulence; CAT)
- 8) 緊急回避操作

以上のうち、1)、2)は事前にレーダーや地上からの気象情報で把握されるからベルトサインも出しやすい。

3)はかつて 1971 年に英国海外航空 (BOAC) B-707 型機が富士山上空で空中分解事故を引き起こす原因にもなったものであるが飛行経路から遭遇の可能性を予知することができる。また、山岳波による強い上昇気流を利用して姉羽鶴がヒマラヤ山岳を超えて往来していることもよく知られているところである。

4)は下降噴流と呼ばれるもので、目に見えない竜巻のようなものである。ただし、竜巻は吹き上げであるが、これは強い吹き降ろしで、時には風速数十メートルにも及び、着陸時など空港周辺の不安定な飛行状態でこれに遭遇し地面に叩きつけられた事故も少なくない。また我が国でも大型クレーンが地上に叩きつけられた事故なども起きている。下降噴流は一般に数分で消滅し、レーダーでも捕捉しにくい現象で厄介な代物である。多くの場合、積乱雲と関係があるが、そうでなくても小さな雲塊の下の下降気流によって起きることもあるようである。パミューダ海域での数々の謎の事故の原因であった可能性も指摘されている。

なお、この気象現象はシカゴ大学のセオドア藤田教授によって発見解明され、これまでパイロットの操縦ミスで片付けられていた空港周辺のいくつかの墜落事故について再調査が行われるようになったことでも有名である。

5)についてもその性格は空港周辺の捕捉しにくい気流の乱れと言う点において 4)に似ており対応の厄介なものである。

6)は空港周辺において大型機の通過直後に発生する機体の幅とほぼ同様な大きさの渦流のことで直後を小型機中型機が横切ったりする場合に渦流に巻き込まれ操縦不能に陥って墜落した事故も多い。離陸と離陸の間が 2 分以上に保たれているのは後流渦による事故を防止するためである。

7)は文字通り、悪天候でもなく予兆も全くないまま突然に遭遇する現象で多くの場合、高空での水平飛行時に遭遇するため運航関係者を最も悩ませているものの一つである。発生時には客室乗務員が機内サービスに携わっていることが多くまた、上下

動の程度も大きい場合が多くシートベルトをしていない乗客や客室乗務員が天井に叩きつけられその後落下することによって頸椎損傷、骨折、時には死亡に至ったケースもある。

8)は何らかの人為的ミスで航空機どうしが異常接近(ニアミス)したり、視界が晴れた際に目前に障害物が現れた際に衝突を回避するためにパイロットが緊急操作を行うことによるものである。最近では2001年に日航機どうしの駿河湾上空でのニアミスで乗務員が重傷を負った例などがある。異常接近警報装置(TCASやEGPWS)などの設備搭載にもかかわらず発生するこの種の事故は管制官あるいは双方の機長の不注意等のヒューマンエラーによって跡を絶たない。

動揺の大きさ

機体の上下動の大きさをG(重力加速度、 $G=1$ は地上あるいは上空で安定に水平飛行している場合の状態であり、 $G=0$ は宇宙で宇宙飛行士の体験している状態で、地上では飛行機がエンジン停止状態で真逆さまに落ちていく場合の機内状態に相当)で表わす。通常の乱気流ではGは負とはならないが、稀に激しい嵐や7)、8)の状態において負の値となることがある。駿河湾沖のニアミスの緊急回避においても負のGが計測されていた。この場合はシートベルトなどで拘束されていなければ人もワゴンも天井に当たって落下する。この浮揚・落下で大怪我をすることがあるがこの状態では立っている人はシートなどに掴まただけでは体を支えることはできない。乗客はベルトサインの如何に関わらず普段から着用しておくことが身を守る方法である。しかし、座席を離れてサービスする客室乗務員やトイレに立った乗客などに対して負のGからこれを保護する方策は十分ではなく今後の課題として残っている。

機体の動揺に対して安全を確保するための研究の動向

○機体前方の気流を計る。

航空気象データなどで予知できないような機体前方の局所的な気流の変化を測定するために機体にレーザの送受信装置(ライダー)を搭載しレーザが機体前方の水の粒子に反射されてくる情報からドプラー効果によって前方の気流の方向・速度を検知しようとするもので我が国でも研究を進めているが実用化までに少なくとも数年を要する段階である。

○負のGに対して客室の安全を確保する。

・通路やトイレにいる人の浮揚を抑止する。

体の浮揚を抑えるにはシートに掴まるだけでは不十分で指を回して握り締めることができるグリップをトイレやシートに取り付け、ギャレーでは同様に握り棒を設けることが有効である。

・ワゴンの浮揚を防止する。

ワゴンが浮き上がろうとする際の重力の変化に自動的に反応する機械的なセンサによって自動的にワゴンを近隣のシートに固定する方法などが考えられる。

おわりに

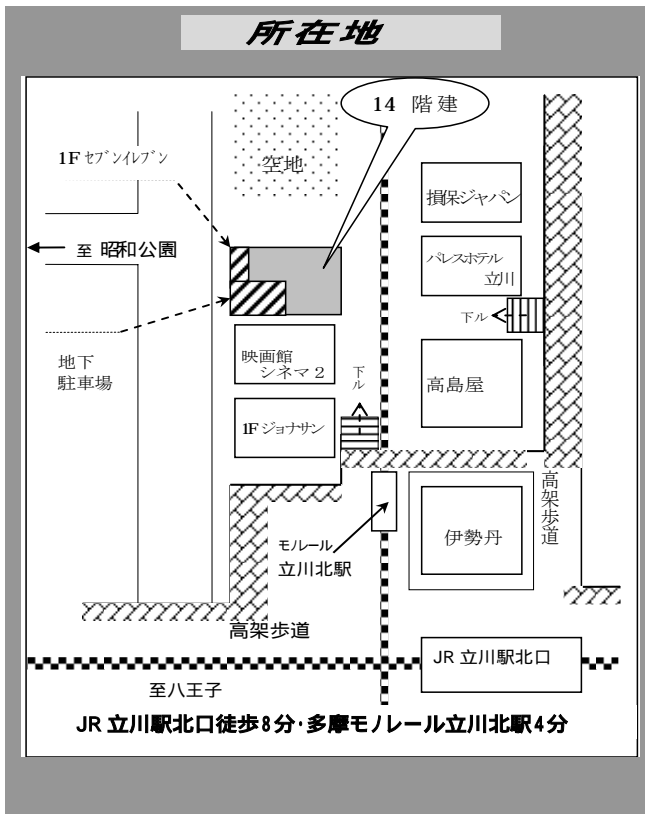
2001年の駿河湾上空での事故に関連して、当時の運輸省が事故防止対策の検討を諮問した際に筆者は専門委員会の座長として検討報告書の作成に携わった。

新たな改善案を実施に移すには以下のような制約や規則をクリアしなければならないが、安全の向上がもたらすメリットとそれを実施するために必要となる負の面とのトレードオフによって前者が優れば世界に先駆けた我が国発の安全対策として実現のための歩を進めたいものである。

- ・ 緊急脱出の際の妨げになってはならない、
- ・ 著しい重量増加をきたしてはならない、
- ・ 著しく客室乗務員や整備の作業数を増加させてはならない、
- ・ 乗客の快適性を大きく損なってはならない、
- ・ 運航に支障をきたすような電磁波を利用するものであってはならない、等々

読者諸氏も飛行機を利用される機会は大変多いものと思う。今度搭乗の機会を得られた場合にはシートベルトを締めながら周りを見渡して空の旅の安全にも想いを至し、何かよい提案を思い付いて頂きたいものである。

所在地



準備10号 誤植訂正(正誤表)

毎度お手数をおかけして申し訳ありません。

訂正をお願いいたします。

頁	段落	行	
<くくじ>欄			
1	左	4	安全学放 逃 →安全学 逃 散
<古稀虹の途方に暮れている日々>欄			
9	3	1	マ ラ ル→モ ラ ル

ご助力ご参加のお願い

本格的な活動開始をまえに目下のところ、会費額や会員の種類など検討中です。今後、本の出版など事業活動を展開して収入を補い、会員の過大な負担を避けながら活動してゆきたいと考えておりますが、本格的な事業活動にいたる前です。寄附などのご助力もお願い申し上げます。

安全問題関係の書籍、古い雑誌など、おもちで不用のものがございましたら、ご寄附お願い致します。特に帯木蓬生氏の本などを収集予定です。その他有益な本、論文など情報をお寄せ下されば幸いです。この会報の編集や校正、ホームページ更新など特に立川市に近い方でお手伝いいただけませんか。ご協力のほどよろしくお願い致します。

今後会員数の増加とそれに見合う理事会の本格的拡大編成の後、今後の決定を待ちたいと思います。志ある方はこの際会員としてご参加下さることを心からお待ちしております。

■ 勉強会のおしらせ (毎週土曜日 10 時～、於：事務所)

テーマとして『源氏と日本国王』(岡野友彦著：講談社現代新書)を批判的に検討し、また併せて第 38 回歴博フォーラム「古代日本 文字のある風景」にもとづいて編集された『古代日本 文字の来た道』(平川南編：大修館書店)なども参照しながら進めてゆきたいと思っています。関心のある方は事前にご連絡のうえ、ぜひご参加下さい。

会費の予定について

会費の予定は、入会金なし、一般会費は年間 5, ～6, 000 円、学生会費は 2, ～3, 000 円、賛助会費は法人からは一口 10, 000 円、個人からはもし寄付金として適宜適時に志をいただければそれを幸いと考えるべきものと思います。詳しくは今月行われる理事会で決定いたします。

***** 編集後記 *****

- ◆ 今回発行が大幅に遅れてしまい、たいへん申し訳ございませんでした。
- ◆ 冒頭でも述べましたが、前回の会報を第 1 号としたのは誤りで、正しくは準備 10 号です。重ねてお詫び申し上げますとともに、ご訂正いただけますようお願い申し上げます。
- ◆ ミニ辞典を復活させて欲しいというご要望をいただき、準備 5 号よりお休みしていたのを再開させました。安全学に関する用語・概念などについてわかりやすくまとめていきたいと考えておりますので、ご意見・ご要望があればぜひお寄せください。
- ◆ 現在、創刊号に向けて体制を整えつつあるところです。会の活動や会報についても、ぜひ皆様のご意見・ご要望をお寄せください。

(MS.;N.N.)

